

「改革・開放」政策の中国を見て

古川 純

10年目の中国再訪

私にとってこの度の訪中視察は2回目の経験であった。1回目は（そして初めての訪中は）、1984年12月に憲法学者訪中団（団長＝小林直樹先生・当時専修大学法学部教授）の一員として、中国社会科学院を通じて北京（社会科学院・北京大学・政法大学・人民大学の訪問と座談会、以下同じ）、西安（陝西省社会科学院）、南京（南京大学）、上海（上海社会科学院）を訪ねた。今回は10年ぶりの訪中なので、北京と上海の大いなる変化の姿を目にしたいと思って期待もした。1回目のときは、文化大革命（1966～1976）終結後の政治と社会の状況に関心があり、とくに憲法研究者としては文革後の1982年改正憲法の運用実態（とりわけ文革時の憲法で認められていた「大字報」＝壁新聞の権利が削除された後での市民の言論の自由の保障）や、中国社会科学院（内閣法制局と調査立法考査局の機能をも果たす）による憲法改正案の検討（1988年改正となって実施された）について座談会（報告・討論会）でいろいろと質問もした。当時は周恩来（1976.1死去）と毛沢東（1976.9死去）という革命の英雄が相次いで世を去った後で湖耀邦総書記（1982.9～、1989.4 死去）のもとで、鄧小平路線の開放政策（1979～）によって広東省の深圳など沿海部の4ヵ所に外資導入目的の経済特区が設けられてはいたが、はたしてそれが社会主義中国をどこへ連れて行くのか、なおよくわからない状態であった。後にそれが「社会主義市場経済」というコンセプト（中国共産党第14全大会・江沢民総書記の政治報告、1992）による経済全体の計画経済から市場経済への移行であることが説明されるのである。私は専門外のために工場見学による経済体制の動きについてはよくわからないので、以下では印象記風に最近の社会の変化について書きとめてみたい。

北京で一社会主義市場経済と「腐敗」

1989年6月の天安門事件から6年が経つ今年、あの天安門広場にはぜひ立ち寄りたいと願っていたので、時間の空きを見て麻島団長が「天安門広場に寄りますよ」といわれたときは、わが意を得たりと寒風の中を時間を気にしながら人民英雄記念碑の前まで行ってみた。有名な記念碑は周りに鎖が張られていて公安部の警官が警戒していた。中国経済はかぎりなく資

本主義に近づいているけれども、逆に政治は共産党統治を批判する反対派の自由を武力行使をしてでも抑圧する不寛容さを崩さないが、警戒の厳しさは今の中国政治を象徴するもののように思われた。

天安門近くの繁華街（のはずだった）王府井は大規模の再開発が行われていたが、何となく再開発事業が途中で止まっていて有名な中国進出マクドナルド第1号店だけが目立っているだけだった。帰国後にわかったところによれば、この再開発に関係して受注企業（香港の華僑財閥・長江実業）から賄賂を受けた北京市最高指導部の陳希同・市党委員会書記と李基炎市長の秘書が逮捕され、なお市幹部20人以上が取り調べを受けた模様ということだった（『週刊現代』1995.3.25号）。その後、反腐敗闘争の結果の報道として4月27日に陳書記が更迭されることが伝えられた（朝日新聞 1995.4.28）。私たちが国有企業の代表的存在の首都鉄鋼総公司を訪問した際、対応した研究所の研究員は「承包制」（生産請負制）の現状と今後について理論的な話をするだけで、質問に対しても何となく論点をそらす答えが多かったが、これまた私は帰国後に背後に首都鉄鋼総公司の香港現地法人会長・周北方の横領容疑による逮捕という経済スキャンダルがあったことを知った。現在の中国のこうした腐敗にはいくつかの説明が可能であろう。一つには逮捕されるのが党幹部であるということは、共産党幹部全体における倫理観の低下を示す。しかし党中央による反腐敗闘争と厳しい制裁によって倫理観の回復は可能であろうか。急速な市場経済への移行は私的なものの急速な開放を意味しており、国家と党と個人しかなかったところに私的な個人の経済活動によって社会的なものが形成され、社会の雰囲気としては個人企業や私営企業による貪欲な富の形成（金儲けの自由）と一種の拝金主義が主流となってきたのではないか。いわば「倫理なき資本主義」ができあがりつつある。二つ目には、人文研の研究会で野村浩一先生（法学部）のご報告（1995.6.10）をうかがって理解できた中国企業文化の背景問題がある。それは、市場経済体制への移行の中で「企業」が創出されてきたが、伝統的に中国企業を支配した縁故主義（同郷関係）・血縁主義の文化がその中に新たに蘇っているのではないかというものである。別な言い方をすれば「あいまいな公私の区別」の問題ともいえよう。最近繰り返し各地で党幹部に出されている各種の禁令（参照、田畑光永『鄧小平の遺産—離心・流動の中国—』、岩波新書、1995.2）は、第2の要因を背景として第1の要因が腐敗を引き起こしていることを物語っている。

上海と蘇州で—「上海ファッション」への道

上海では黄浦江の「バンド」に近く、また繁華街の南京路に沿った「和平飯店」に宿泊し

たので、夜の南京路をブラブラ散歩することで第2の首都（人口1350万人）ともいべき上海の賑わいに触れることができた。ここに1枚の写真があるが、これは南京路の途中にある横丁で入口に「云南路灯火光夜市」(YUN NAN ROAD NIGHT BAZAR) という横長の看板が吊り下げられた露天屋台街である。私たちはその屋台で長い串に刺した鳥のモツ焼きと甘い白玉だんごを食している時に、上海に住む子ども連れの若い父親に声をかけられた。東京は池袋に住んで仕事をしながら日本語を勉強して帰ってきたが、上海ではそれを活かした適当な職がなかなか見つからないということだった。なかなか流暢な日本語で、思いがけず庶民の日中交流ができたような気がした。他の団員は北京で昼間の露店を少し覗く機会があったらしいが、次の訪中団の視察の機会にはそのような日常的な触れ合いが含まれるゆとりがとられるよう希望したい。

蘇州訪問は日曜日だったので観光の一日を楽しんだことになるが、蘇州は古くは春秋時代の呉の首都だった歴史と、水路＝運河による交通により「東洋のヴェニス」（という宣伝だが、むしろ「中国の柳川」か？、しかし水は汚かった）といわれる風景とで有名な観光地のため、各地からの観光客でたいへんな賑わいであった。10年前のときも北京に比べて上海は女性のファッションが多彩だという印象が強かったが、今回は気候のせいもあり、上海・蘇



日本語を学んだという中国人男性とその子供（左側の二人）。中央が古川純団員、その手前は加藤佑治団員、右端は浅見和彦団員＝泉団員撮影

州の女性がよりカラフルでデザインも多様な服装になった、その意味でファッション性が豊かになったように感じられた。蘇州の観光客の中には香港や台湾からの女性も含まれていたのかもしれないが、こうした変化は服飾産業のあり方に考え方の大きな変更を迫ることになる。北京の中国企業管理協会の方との答礼宴や上海の社会科学院の方との謝礼宴で個人的に質問をしてみたことであるが、市場経済への移行によって、個性なき量としての大衆を消費者対象とした従来の「少品種大量生産」型から個性のある選り好みする消費者を対象とする「多品種少量生産」型への移行、供給者＝生産者の優位から消費者の優位への移行が迫られるのではないかと。その結果、人々の消費行動や選好の調査研究の重要性が認識され、デザインやマーケティングの研究が企業内部で必要になってくるのではないかと。これに対する答えは、市場経済は市場のニーズを知らなければ生産の意味がないので、当然そうした消費者のニーズ調査が必要であり、調査結果に応じた製品の開発と生産を行うために企業には研究部門が設けられているというものであった。上海ファッション（アパレル産業によるファッション・ショーがTVで紹介された）はまだ欧米の模倣の域を出ないが、戦前のようにパリ・ニューヨークと肩を並べる「上海ファッション」が登場する日が来るでしょう、という答えもあった。

帰国後、朝日新聞に「奔流中国 第1部 上海から 1～15」(4/25～5/10)が連載された。出かける前に余り活字で勉強をして予備知識に頭を占領されるよりも、自分の目や耳や鼻、口(舌)で感じたところをもとにあらためてさまざまな解説や分析を読むほうが、スポンジに水がしみ込むように物事を理解しやすいと、いつも考えていたので、上海の町並みや人々の顔を思い出しながら連載記事を読んでみた。「下海(シアハイ)ビジネス」の項目で紹介されていた、警察の別会社(「保安公司」)によるパトカーの有料先導サービスや、人民解放軍の輸送トラック貸出しと軍用電波使用によるポケベル会社経営などの話は、実に驚いた。「あいまいな公私の観念」の項では、「公私はくっきりとは切れていない。『公』は『私』の延長線上にあり、『私』の単なる寄せ集めではないか」と指摘されている。はたして中国では、西欧や日本でいう市民的「公共」の観念は生まれるのであろうか。そのカギを握るのは、「中産階級」の形成であろう。「開放支える『中産階級』」の項では、上海社会科学院の中に中産階級を研究テーマとする学者が現れたと紹介されている。昨年秋に上海で1100人を対象に行われた中国初めてのホワイト・カラー調査では、「政府の許せない行為」に「腐敗」56%、「官僚主義」36%があげられているというから、(上海で5万～7万人、全国で200万人程度ではあるが)これらの人々のなかに今後、新たな市民的「公共」意識の形成が期待できるのではないかと私は思う。